菅野満子の手紙

菅野満子の手紙

□小島信夫

菅野満子の手紙

一九八六年 二 月二五日 第一刷印刷
一九八六年 三 月一〇日 第一刷発行

著 者 小島信夫

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
一〇一 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
出版部 (〇三) 二三八―二八四二
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一
製作課 (〇三) 二三八―二九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 二六〇〇円

N. KOJIMA, Printed in Japan, 1986
ISBN4-08-772555-3 C0093
著者との了解により検印を廃止いたします。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

沈没させないように楫をとることに専念する。この潮流こそめあてでもあったみたいだからである。こうして目的地に無事上陸したかに見えるかもしれない。しかし、そのことより何より漂流中、思い出がのこるというか、今となればマストにあたった風の音、ときどき訪れてきた鳥の啼き声をなつかしむことになったとしたら、それが奇跡が生じたということになるといいたいような気がする。

作者はたった一つ、コミュニケーション、というよりせめて古くさくみえる「友愛」というものがほしくて、人物の語る手紙の海にひたったのであろう。

昭和六一年一月

著者

菅野満子の手紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

最近、手塚富雄氏は伝記『ヘルダーリン』を出された。二五〇〇枚にも及ぶたいへん綿密な研究的作品である。

筆者は、二ヶ月ほど前から読みはじめようやくその半ばに辿りつき、ほかの仕事のために、心ならずもここしばらくはこの薄幸の詩人ともお別れの状態なのである。この著作については、あまりにも思うことが多く、中でも、けっきょくはこの詩人の著作、たとえば『ヒュペーリオン』などの作品そのものの中へと迫り、さいごはいさぎよく下駄をあずけようという態度が見えるのが筆者の共感をよぶ。

しかし、それはそれとして、筆者は、フランクフルトの豪商ゴンタルト家の少年の家庭教師として雇われたヘルダーリンと、夫人ズゼッテとの愛の物語そのものが忘れられない。そのとき彼は二十七、八歳であり、夫人は一歳年上であった。

この二人の愛はさっき名をあげた『ヒュペーリオン』二巻の詩となった。手もとの辞典によると、「一七七〇年のトルコの支配に抵抗するギリシア人の蜂起を背景としたギリシア青年ヒュペーリオンの革命戦士的な愛国行動とディオティーマへの愛を織りなした賛歌ふうの書簡体小説」というふうに述べられてある。

これは当時の封建ドイツのみじめさを背景としていると続けられているが、詩による書簡体小説であるということに注意しなければならない。筆者はどうしたことか、戦前においても戦後においても、この『ヒュペーリオン』を手にしたことがなかった。まして、このディオティーマという女性が、ズゼッテをモデルとしたものであることなどまったく知らなかった。さいきん筆者が『ヒュペーリオン』のことで語りかけた人で、この作品を読んだことのない人は一人もなかった。筆者は驚き、あまりいい気持がしなかった。

伝記『ヘルダーリン』をライフワークとされた手塚先生とは、筆者は夏の間、山の中の村で同じ隣組に住んでいる。人知れず自然とそこに世界中の人生のあるところの書物あいてに、日を送ろうと思っていたのに世話役さえ仰せつかり、夏一回の会合では先生とお会いする。先生は度々病気で入院され、退院されると、この伝記にかかりきり、二〇〇メートルしか離れていないところにお住まいであるが、会合のとき以外はおめにかかることもない。もっともご自分の健康状態のこともあり、一昨年夫人をなくされたりして山の中へこられても、しばらくすると、もう帰京され、御嬢さまから、父は今朝帰りました、宜しくとのことでございました、と知らせがあるというぐあいである。それでは、あの車の音はそれだったのか、もし知っていたら、ごあいさつをするところだったのに、と思ったりする。

四年ほど前、さっきもふれた会合のとき、筆者のとなりに坐っておられ、手洗に立つと、たまたま

先生は用をすませてハンカチを取り出しておられるところで、
「われわれはもう持ち時間がすくなくなったものですから、時間との競争です」
といわれた。
暗にずっとかかりきりの仕事のことを仄めかされていたのだが、筆者は『ヘルダーリン』のことだと気がつかなかった。
昨年秋、山から帰ると朝のテレビで先生は下落合のお宅の書斎で『ヘルダーリン』の伝記がいよいよ完成したといわれるのをきいて、三年前のことを思い出した。
そのときの先生は、「私は学生時代からヘルダーリンが好きで、ゲーテは親しめませんでした。あとになって、大きくって深すぎるゲーテにも抵抗がなくなりました」
といわれた。
おおくりいただいた『ヘルダーリン』の挿みこみの「月報」の中であったと思うが、私は旧制の松本高校に赴任すると、『ヒュペーリオン』をテキストにした。ずいぶんむずかしいものを使ったが、それほど夢中だったのでしょう、といったことを語っておられる。筆者の記憶ちがいでなければ、そのときの学生の中には、臼井吉見や、筑摩書房の亡くなった古田晁氏などがいたのであろう。いずれにしても先生と学生とはあまり年齢がちがわなかったし、いっしょになって文学雑誌をやっておられた模様である。
ヘルダーリンは、ゲーテの生家のあった同じ通りにある「白い鹿」と呼ばれた邸宅や別荘で午前中長男のヘンリー少年を教えると、あとは、ズゼッテと語って時間をすごすことが多かった。
一七九七年の九月二十四、五日ごろ二人が語っているとき、ズゼッテの夫ヤーコプ・ゴンタルトが部屋へ入ってきて解雇をいいわたした。手塚氏はこのときズゼッテが、夫の言葉にたいして、ヘルダ

ーリンに向って発作的にこう叫んだようだと書く。
「そうです、あなたはすぐにこの家をお去りにならなければなりません」
夫にたいする明らさまな敵意だ、といい、次の手紙を証拠として引用する。ここのところを氏の文章はこう綴られている。
「ヘルダーリンとズゼッテはこれでこの家とヘルダーリンとのつながりに関しては事が終ったと感じた。こういう破局的な形に事を運んだことが後にズゼッテの切ない悔いとなった。しかし彼女はあの言葉を叫ばずにはいられなかったのである。彼女はその場合の自分の気持を的確に把握してやがてヘルダーリンにこう書き送った。『それ（この家を去るようにと強く頼んだこと）はあのような暴力的な引き裂きに会ってわたしの心のなかにあまりにも声高になったわたしの愛をすっかり感じとることへの恐怖だったと信じます。わたしの感じた激しい力がその場でわたしをあまりにもたやすく負かしてしまったのです』」
筆者は、ここのところで、一つ大きく深呼吸することにしよう。ズゼッテの声と顔があまりにうかびすぎるからである。夫の顔つきもヘルダーリンの様子も、息苦しいまでにうかんでくるからである。
だが、そこで次を見なければならない。
さっきの筆者の引用文に続いてバーレンがあって、
（これはまもなくわれわれが見ることになるいわゆるディオティーマの手紙の一節である）
と書いてあるからである。先生の文章は、このあとヘルダーリンが「儀礼を失わぬ態度で去った」と記してある。
ヘルダーリンは、やがて『ヒュペーリオン』にとりかかるのであるが、この往復書簡のディオティーマの名で呼ばれるようになる、十七通のいわゆる「ディオティーマの手紙」が残っており、その中

の一節だというのである。この手紙は既に浅井真男氏訳があるそうである。

筆者の手もとには、ただ今『ヒュペーリオン』もないし、それに筆者が読み終えたつもりになっている先生のこの著作の上巻の中の『ヒュペーリオン』からの引用の中の「ディオティーマ」の言葉の中に、この十七通の手紙がそっくりつかわれているのであったかもはっきり記憶していない。これは筆者の怠惰のせいで、こんなこと大きな声でいえたものではないが、筆者は近頃、とても重要、重大なことも、忘却の淵に沈んでしまっていることをみずから発見しても、ひたすら許しを乞うて、しばし、その淵に漂っていたい気がするのである。

先生は筆者より一廻り年長である。この生意気な態度に失笑されるであろう。ここで筆者は、十一歳であったヘンリーが、ヘルダーリンが去ったあと、二、三日後に書いた手紙をちょっと書きうつしてみることにしよう。

「親愛なヘルダー（Hölder）！

先生が行ってしまったことに、ぼくはほとんどがまんできません。ぼくは今日ヘーゲルさんのところへ行きました。ヘーゲルさんは、先生はもうとうからよそへ行くつもりだった、と言いました。帰りの道でヘーニッシュさん（ヤーコプ・ゴンタルトの兄弟の家の家庭教師）に会いました。ヘーニッシュさんは先生が出て行かれた日にわたしたちのところへ来て、何かの本を探しました。本はありました。ぼくはそのときお母様のところにいました。ヘーニッシュさんはイェッテ（ヘンリーの妹）に、先生はどこにいるかとたずね、イェッテは、先生は行ってしまったと答えました。ヘーニッシュさんも（今日）やはりヘーゲルさんのところへ行って、先生のことを聞こうとしていました。ヘーニッシュさんはぼくといっしょに歩いて、どうして先生は出て行ったのか、と聞き、とても悲しい、と言いました。お父様は食事のとき、先生はどこにいるか、とたずねました。ぼくは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

先生は出て行ったと答え、先生がよろしくと言っていたと伝えました。お母様は元気です。先生にくれぐれもよろしくと、そしてわたしたちのことをたびたび思い出してくださるようにと、言っています。お母様はぼくのベッドをバルコニー部屋に移させ、先生がぼくたちに教えてくださったことをすっかりいっしょにおさらいしようと言っています。早くぼくたちのところへ帰ってください、ぼくのホルダー（Holder）。そうでなかったら、誰に教わって勉強したらいいでしょう。タバコをいっしょに送ります。それからヘーゲル先生から渡されたポッセルトの『年代記録』（月刊の政治雑誌）の第六号を送ります。

さようなら、親愛なヘルダー

先生のヘンリー」

伝記によるとズゼッテは、ヘルダーリンに書き送った。

「そういうときにたびたび思いました。いったいこのように大切な純い愛がこれからのち煙のように消え失せて、どこにも跡をとどめないようになっていいものかしらと。」

彼女は「秘められた誇りは彼女を寡黙にし、運命の打撃は彼女の気持を厳粛にした。自分でも驚くほどに我慢強くなっていた。進んで前より質素な暮らし方をし、ほとんど常に子供たちとだけいっしょにいた。そしてできるだけ子供たちのためによい母親になろうとした」と先生は伝記『ヘルダーリン』で語っておられる。筆者（わたし）はここにおいても、しばらく、いってみれば思いに沈んだ。いうまでもなく筆者（わたし）はヘルダーリンのことだけではなく、夫のヤーコプ・ゴンタルトのことを考えざるを得なかったからであった。それだけでなく、さっきもその名の出てきた、ヘルダーリンの学校のわずかに先輩であるヘーゲルのこと、それから、シラーやゲーテのこと、シェリングのことなどに思いをのばさざるを得なかったからであった。筆者（わたし）はとりちがえていたようだが、実は『ヒュペーリオン』第一巻

は九七年の四月に出ていて、「おそらく第一番にその一本をズゼッテに献じた。それには献辞として『高貴な性質をもつ人たちの影響は芸術家にとって、日光が植物にとってそうであるように必須のものです』」から始まる、この引用部分の三倍にあたる長さの文章を書いたのであった。

第二巻は九九年に出来る。三五〇部の一冊を垣根ごしにズゼッテに渡した。ここのところを筆者は今、伝記のページをめくってさがしあてようとするのであるが、どこに行ったか見当らない。彼らはその方法でしか会うことができなくなっているからであり、その一冊が今ものこっているのである。ゴンタルト家であったのか、それとも図書館のようなところであったのであろうか。筆者は締切の時間にせまられて、今のところこのままにして先きを急がねばならない。

伝記によると、二人が別れてから、ズゼッテはどんなに遠くからでもいいから、姿を見たいと思った。それはその姿が豆粒ほどの大きさにしか見えなくとも、もし姿を見とどけることができれば、先ず第一の願いは達せられたことになるからである。彼らは劇場で偶然出あった。このことが彼女の慾求を高まらせた。「三年間一つ屋根の下で暮らした者が半時間をいっしょに過ごしても、おかしいわけはございますまい。その反対の方がずっとおかしいことでございます。」と最初の「ディオティーマの手紙」は、いっている。

「こうしてヘルダーリンがホンブルクに住んだ二ヵ年近く、種々な苦心のもとに文通はつづいた。ズゼッテの部屋を訪ねるようなことが、くりかえして行なえるはずもなかった。」

彼らはあいびきのときを決めた。

「二人は毎月の第一木曜日に互いの姿を見ることにした」

ところが計画通りには行かなかったというふうに書かれてある。それに彼女が別荘にいるときと本宅にいるときとでも事情が異なった、とも書かれている。彼らは思うように会えぬとき、文通に頼る

ほかはなく、その手紙の渡し方については、こんなふうになっている。
あるときは垣根ごしに手渡した。これは彼女が別荘にいるときであろう。窓の下を通るヘルダーリンに手紙をおとしたのは、本宅の「白い鹿」にいるときであろうか。してみると『ヒュペーリオン』の第二巻を垣根ごしに手渡したとあったのも、やはり別荘のことであったのである。ヘルダーリンはこのときホンブルクという町から通ってきていた。
筆者はここで、先生の伝記を借用してきたことを改めてお詫びすると同時に、読者に向ってくりかえすことにする。
ズゼッテは、さっきもいったように、ズゼッテとしてではなかった。あとで「ディオティーマの手紙」と呼ばれるようになるところの手紙を書くところの女であったと。なぜなら『ヒュペーリオン』第一巻はもう世に出て五ヶ月になっているし、第二巻は書きつづけられ、事実、二年後に、その一冊は、垣根ごしに手渡されるのだから。
伝記にあるように、ある日ヘルダーリンの手紙は、彼女の夫の手に渡った。彼は『ヒュペーリオン』の中で生きたであろうか。筆者は今月分を渡したあとでゆっくりしらべて見ようと思う。この宿題が筆者の一つの楽しみとさえなった。
ある日ゲーテはある若い夫人の夫と連れ立って河沿いの道を歩いていた。老いかかっていたこの偉大なる男性にとって回春は必要であった。この回春のことは、口にしない方がいいかもしれない。ちゃんと語らなければ、誤解の元であろうから。とにかく彼女は「ディオティーマ」よりもほんの二、三歳年長であるばかりであった。夫人の名は筆者は失念した。いずれその名もさっきふれた河の名も、彼女の夫の名も、その年齢も告げさせてもらえると思う。たぶんその名を知らぬのは、筆者ひとりなのかもしれないが。

筆者は数年前、ゲーテにかんする分厚い研究書をよんだ。著者は菊池栄一という人で、筆者は旧制高校でドイツ語を習った。先生は手塚先生と同級だったと記憶する。菊池先生の弟に当る人は秋田大学の教師をしており、つい先だって亡くなった。この人と筆者は友人であった。菊池先生訳の『往復書簡　ゲーテとシルレル上巻』を、筆者は、三年ほど前に神田の古書店で発見し、今、眼の前の本棚にある。昭和十八年、桜井書店刊で奥付に五〇〇部刷と記されてある。たったの三五〇円で売っていた。いかにも安すぎるのではないだろうか。

跋によると、先生は十数年前から、大阪府下桜井谷村の寓居で仕事をはじめたのだそうである。ゲーテの百年忌にあたる一九三二年には上中下三巻の飜訳を完成しようと、ひそかに心を期していた。ところが、百年忌が近づくと記念事業がさかんになったのに、菊池先生はまだ上巻にあけくれしているふがいない自分にむしろあわれみをおぼえたとある。

「学窓を出て日も浅かったあの頃、参考文献など一冊ももたず、徒手空拳レクラム版のテキストにしがみつき、上巻の完成をみたのは何年のことか、今は記憶すらもない」「その後東京に転任するようになり、オックスフォード版の英訳やヨーナス編集のシルレル書簡集を求めることができ、やっと最近になって、また府立高等学校長宇野喜代之介氏の厚意によりライツマンの編集版をお借りすることができたときは、ほんとうに救われた思いがした」

この往復書簡集は上巻しか出版されず、今に及んでいるときいている。最後の書簡は一七九六年十二月二十七日付のゲーテからシルレルあてのものである。ついでにいっておくと、ヘルダーリンがゴンタルト家を去ったのは、前にも書いたように九七年の九月であった。

ゲーテともうひとりの男とは、河のほとりを歩きながら、ときどき立ちどまった。ゲーテは河の方を眺めた。彼はその男から会ってくれといわれたとき、覚悟はしていた。ヘルダーリンは三十前であ

り、相手の夫人は一つ年上であったことは前にもいった通りである。ゴンタルト家の部屋へ主人のヤーコプ・ゴンタルトが突然入ってきて、あの事件があったときから何十年もたってから、ゲーテは彼のさいごの恋愛相手の夫人の主人に会った。そのときゲーテは、世間はもちろん自分も偉大な存在であると思っていた。

二人の男の話しあいは簡単におわった。ゲーテは今後はあなたの申し出のように、夫人とは会わないことを約束する。このことは、私から申しましょうか、それともあなたから伝えていただくことにしましょうかといった。

「いえ、彼女は私の家内ですから、私から伝えさせて下さい」

と相手はいった。

菊池先生のゲーテ論一巻は、実は夏におとずれる例の山の家においてある。いま筆者は五月になったら、さっそくその本をとりに出かけようと考えている。

ゲーテと若い夫人は、筆者の記憶では、ペルシャの詩人ハーフィズのエロティシズムに溢れた詩を下敷にして、暗号通信のようにして、一種の文通をかわしていたそうである。それを知ったとき筆者はびっくりしてしまった。先生は、こんなやりとりを、日本の昔の歌人たちにくらべておられ、比較研究をしておられたが、どうもそういうことではすまされない、あやしげな、許されないようなもののにおいを、感じたのかもしれない。

これらの二人の夫人は、これらの事件のあと数年で世を去っている。「ディオティーマ」は、子供がひろってきた猩紅熱に感染して死んだが、伝記によると、ヘルダーリンとの別離の悲しみと、二人の間の緊張の弦がきれたのだろうといっている。

ゲーテの相手となった夫人は、夫からゲーテとの交際が終りとなったことをきいた。

彼女はそのあと急に枯れしぼんだようになり、さっきもいったように二年しか生きなかったと書かれていたことだけはおぼえている。

ところで筆者はつい最近、二十年前に書いた『女流』のことを思い出した。ある婦人雑誌の座談会で『女流』の主人公の女流作家、菅野満子は由起しげ子であり、彼女と、彼女の夫の印象が語られていた。筆者のところに雑誌をもってきたのは、『すばる』の編集長である。約束の小説の締切も迫ってきていた。筆者は、そこでこうして書いてきた文章のことを思い立った。

2

筆者は先月来、身辺あわただしく雑事にまぎれて過した。その中で五月の半ば約束の本に出あうべく山の中へやってきた。

山を登りはじめると、いくらか盛りをすぎたとはいえ、白いコブシの花が火のともった提灯をつけたように姿をあらわした。ホラそこに、ホラあそこにといったぐあいに、競うように、遊びたわむれるように、その数はふえる。登りつめて雪どけの水でくずれた道の果てに辿りつく頃には彼らも姿を消した。

すけすけの樹の間から手塚先生の家の屋根が見えた。去年帰るときにはまったく見えなかった山が見えた。二十年をとりもどしたかに思えた。そのころは樹木は一本もなかったのであるし、そのころ筆者はそこにはいなかったのであるが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.